

副詞的要素としての遊離数量詞

加藤 敏 三

1. 初めに

次のペアは、(a)では数量詞がそれに修飾される名詞句と構成素を成しているが、(b)では両者は離れている。

- (1) a. 太郎は3台のコンピューターをいつも使っている。
b. 太郎はコンピューターをいつも3台使っている。
- (2) a. 3台のコンピューターがいつも故障している。
b. コンピューターがいつも3台故障している。

この数量詞遊離¹と呼ばれる現象は多くの理論家の関心を集めてきており、多くの事象が観察されまた様々な提案がなされてきた。その中でも高見(1998)と三原(1998a)は特に重要な研究である。前者は、それまで最も有力な仮説とされてきた Miyagawa (1989)の相互c統御条件による数量詞遊離現象の説明を覆した上で機能論的な説明を提案したものであり、また後者はこの構文に課せられる意味論的な制約を説得的に論じた研究である。

数量詞遊離に関する筆者の見解は次のものである。そのうち本稿では(3b, c)を中心に論じていく予定である。

(3) 筆者の見解

- a. 遊離数量詞を用いるには、数の取り立てに意味がなければならない。
- b. 遊離数量詞は名詞の副詞用法である。
- c. 遊離数量詞は動詞を修飾するものであるので、まず動詞句副詞として解釈され、次の候補として文副詞として解釈される。
- d. 遊離数量詞は(「先行詞」とではなく)動詞の項と結びついて解釈される。どの項と結びつくかはどの助詞を取っているかによって決定される。「先行詞」が現れている時には助詞を取ることができないため助詞を復元しなければならない。復元できる助詞は、その助詞がないのにあると見做されることのできるどころの、省略可能なものでなければならない。
- e. 「先行詞」がある場合には、遊離数量詞は「先行詞」と同格関係にあると解釈される。

本稿の構成は以下のものである。2節では Miyagawa の分析とそれに対する高見の批判を見る。3節では高見の機能論的代案を批判的に検討し、その問題点を探る。4節ではその代案として(3)を論じる。5節はまとめと結論である。

2. 相互 c 統御条件

2.1 Miyagawa の提案の概略

次に見るように、数量詞遊離は自動詞や受動文の主語(4)と他動詞の目的語(5)に結びつけることは容易であるが、他動詞の主語(6)や後置詞句内の名詞句(7)と結びつけることは容易ではない。

- (4) a. コンピューターがまた3台壊れている。
b. コンピューターがまた3台壊されている。
- (5) a. その教師は生徒を授業中に3人殴った。
b. 私は同僚をその事件に関しては3人疑っている。
- (6) a. 教師がその生徒を授業中に3人殴った。
b. *教師はその同僚をその事件に関しては3人疑っている。
- (7) a. *太郎は公園でいつも3つごみ拾いをする。 (3つ=公園の意味で)
b. *太郎は学生といつも3人映画を見に行く。
c. *太郎は公園から伝書鳩を3つ放してみた。 (3つ=公園の意味で)

Miyagawa (1989)はこの事実を次のように説明している。

(8) Miyagawa の提案²

数量詞(又はその痕跡)とそれが修飾する名詞句(又はその痕跡)は互いにc統御していなければならない。

(9) Miyagawa の前提

- a. 助詞ハ、ガ、ヲは後置詞ではなく、よってそれらがついた名詞句は枝分かれない。
- b. それ以外の助詞は後置詞であるため枝分かれる。
- c. 非対格自動詞の主語はVP内に基底生成される。

(5)では数量詞もそれが修飾する名詞句とともにVP内にあり相互にc統御している。(4)は非対格自動詞と受動文の例であるが、これらはいずれも主語はVP内に基底生成されているので、その痕跡と数量詞が相互にc統御している。一方(6)は主語の痕跡をVP内に持たないため、数量詞と相互c統御関係にはない。また(7)は数量詞に修飾される名詞句が枝分かれのある後置詞句内にあるため、やはり数量詞と相互にc統御することはない。

2.2 高見(1998)による批判

Miyagawa の提案に対する高見(1998)の批判の要点は(10)である。

- (10) a. 相互c統御が成り立たない場合でも数量詞遊離が可能であることがある。
b. 相互c統御が成り立つ場合でも数量詞遊離が不可能であることがある。

(10a)の例として高見は次の例文を提出している。(11)と(12)は他動詞の主語と数量詞が関係付けられる例であるが、前節で見たように、他動詞の主語とVP内の数量詞とは相互c統御関係にはないはずである。

(11) A: この新刊雑誌、売れていますか？

B: ええ、今朝も学生さんがそれを5人買って行きましたよ。

(12) a. 灘高の生徒は、毎年東大を80人以上受験する。

b. 僕はアパート住まいだけど、最近同僚が家を4、5人次々と建てました。

(高見 1998, (17), (18))

また、高見は、目的語がある場合でも、数量詞に「だけ、も」のような強調を表す副詞がついていると、数量詞が主語を修飾することがより容易になることを観察している。

(13) a. 学生がレポートを3人だけ提出した。

b. 学生が僕の授業を途中で5人もやめました。

c. 学生が私の本を2人しか買わなかった。

d. 我が子が故郷を3人とも出て行ってしまった。

(高見 1998, (19))

付加詞を遊離数量詞が修飾するのはMiyagawa (1989)では前節で見たように不可能とされているが、高見は次例のように付加詞を数量詞が修飾しても容認可能である例を観察している。このような例では、数量詞に修飾される要素は後置詞句内にあるため、数量詞と相互c統御関係にはないはずである。

(14) a. 去年、花子はパーティーに3つ来た。

b. 会社訪問で、地元の企業に2つ行ってきた。

c. 花子は、(年末年始にかけて) クリスマスパーティーに2つ、新年会に3つ行った。

(高見 1998, (22b) (23))

このように相互c統御が成り立たない場合でも数量詞遊離が可能であることを高見は十分に立証している。

上記の場合とは逆に、相互c統御関係が成り立っていても数量詞遊離が不可能な場合があることを高見は観察している。(15)の動詞は全て非対格動詞であるため、Miyagawaの説明では主語の目的語位置にある痕跡は数量詞と相互c統御関係にあるはずであり、よってこれらの例は適格でなければならないはずである³。

(15) a. ?* 生徒がこの階段で突然3人転んだ。

b. ?* 交通事故がこの交差点で不注意が原因で3件起きた。

c. ?* 兵士がこの戦場でバタバタと7人倒れた。

(高見 1998, (27))

高見は更に進んで、様態／理由の副詞（句）を取り除いてやれば、(15)の容認性の低さが解消するという、非常に興味深い観察をしている。

- (16) a. 生徒がこの階段で3人転んだ。
 b. 交通事故がこの交差点で3件起きた。
 c. 兵士がこの戦場で7人倒れた。 (高見 1998, (28))

このように、高見は数量詞遊離に関しては、相互 c 統御関係は必要条件でも十分条件でもないことを見事に立証して見せている。この件に関してはこれ以上付け加えるべきことはないように思われる。次節では、高見の提出する機能論的代案を概観する。

3 高見の機能論的代案とその批判的検討

3.1 はじめに

高見の結論は次のものである。

- (17) 数量詞遊離に課される機能論的制約：
 文中にある名詞句が、その文の主題として機能することができる場合にのみ、その名詞句は数量詞遊離を許す。 (高見 1998, (64))

- (18) 遊離数量詞に課される機能論的制約：
 遊離数量詞は、日本語の文の情報構造(19)を遵守しなければならない。

- (19) [Q_i [s … e_i … V] Q_i]
 有標焦点 → | 焦点以外の要素
 より重要な情報 (高見 1998, (84) (83))

説明の都合上、(18)の主張から概観する。(19)の Q は遊離した数量詞を表している。S の左側は、かき混ぜで文頭に出され、有標焦点となっている場合であり、S の右側は後置文の後置要素として文尾に出された場合である。矢印は、動詞自身が最も重要な情報でない限り、最も重要な情報を担う要素が S 内では動詞の直前に置かれる、という久野(1978)の観察を表したものである。

3.2 情報の重要度に関する高見の説明

3.2.1 目的語優先の傾向

まず高見は(20)をあげて、情報の重要度の原則を確認する。なお、以下の議論は、例文の特定の要素に強調ストレスを置かない場合だけを考察の対象にしている。

(20) a. 学生が本を買った。

b. 学生がそれを／その本を買った。

(高見 1998, (70))

(20a)の主語と目的語はともに不定名詞句であるためどちらも新情報、すなわち最も重要な要素と解釈される資格があるが、しかし実際には動詞の直前にある目的語が最も重要な要素として解釈される。一方(20b)では目的語が定名詞句であるため、不定名詞句である主語が最も重要な情報として解釈される。さて、2.1節では、他動詞の場合遊離数量詞は主語ではなく目的語に関係づけられる、という前提で Miyagawa が議論を進めているのを見た。例えば(21a)がその例である。しかし(21b)では他動詞文であるにも関わらず、主語が遊離数量詞と関係づけられている。

(21) a. ?* 学生が本を 4 人買った。

b. 学生がそれを／その本を 4 人買った。

(高見 1998, (71))

これに対する高見の説明は下に引用したものである。

数量詞「4人」が、動詞の直前に置かれているため、最も重要な情報として解釈されるが、一方、目的語の「本を」も不定名詞句であるため、(20a)で見たように重要度の高い情報として解釈される。そのためこの文は、何人の学生が本を買ったかに関する記述なのか、4人の学生が何を買ったかに関する記述なのか決定できず、多くの人々が不自然さを感じるものと考えられる。一方(21b)では、目的語が定名詞句であり、重要度の低い情報であるため、「4人」が最も重要な情報として解釈される。そのため、この文は一義的に何人の学生がそれを(その本を)買ったかに関する記述として解釈され、日本語の文の情報構造に合致して適格となる⁵。(p.100)

次の他動詞構文に対する高見の説明も同趣旨のものである。(11)は目的語が代名詞「それ」であるため談話情報上重要な要素ではなく、そのためこの文は何人の学生が買って行ったかに関する文として解釈される。(12)でも目的語の重要度は相対的に低いとしている。

(11) A: この新刊雑誌、売れていますか？

B: ええ、今朝も学生さんがそれを5人買って行きましたよ。

(12) a. 灘高の生徒は、毎年東大を80人以上受験する。

b. 僕はアパート住まいだけど、最近同僚が家を4、5人次々と建てました。

(高見 1998, (17), (18))

要するに高見の説明は、数量詞が動詞の直前にある時には、それを焦点として解釈するのを妨げる要素があってはならない、ということを出張していることになる。動詞の直前という位置は最も重要な要素の指定席である。一方、実際に最も重要な要素は他動詞文では通常の場合目的語である。そのような状況は、最も重要な情報が2つあることになってしまうので許されな

い。よって、他動詞文で目的語が談話情報上重要でない場合にのみ、遊離数量詞を主語と結びつけることができる、という論理である。

実はこの高見の議論にはかなり問題があるように思われる。前節で Miyagawa による分析を概観したが、それは大まかに言って次のパターンを説明するために提案されたものであると言ってよい⁶。

(22) 数量詞遊離のパターン

- a. 主語; 数量詞; 自動詞
- b. 主語; 目的語; 数量詞 \cdot_{ij} 他動詞
- c. 主語; 後置詞句; 数量詞 $_{ij}$ 自動詞
- d. 主語; 目的語; 後置詞句 $_k$ 数量詞 $\cdot_{ij}/_k$ 他動詞

これはもちろんごく大雑把に捉えたものであり、その反例は既に高見が十分示しているところである。しかし重要なことは、そのような反例にも関わらず、上のパターンは傾向としては紛れもなく存在する、という事実である。例えば他動詞文では遊離数量詞は圧倒的なバイアスをもって、主語とではなく目的語と関係づけられるという事実がある。次の(23)では、主語も目的語も共に人間であり共に不定名詞句であるにも関わらず、事実上目的語が3人の読みしかない。

(23) 教師が学生を昨日3人殴った。

高見の説明では、この事実がどのように説明されるかは、本人が触れていないこともあり必ずしも明らかではないが、次のようになるはずである。なお、遊離数量詞が後置詞句内の名詞句と結びつかないという事実(22c,d)については高見は詳細に論じているが、その結論はここに再掲する(17)であり、これについては後に批判的に検討することになる。

(24) 高見の分析が含意する(22b)の説明

- (A) 数量詞が動詞直前にあれば、それは最も重要な情報の指定席であるのでそれとしての扱いを受ける。
- (B) しかし実際には、通常の場合、目的語が最も重要な情報である。
- (C) もし数量詞が目的語と結びつくのなら、両者は同じものを指しているので二重焦点とは見なされない。
- (D) しかしもし数量詞が主語と結びつくのなら、目的語と数量詞は二重焦点を成してしまう。

(17) 数量詞遊離に課される機能論的制約:

文中にある名詞句が、その文の主題として機能することができる場合にのみ、その名詞句は数量詞遊離を許す。
(高見 1998, (64))

(24)は実は限られた説明能力しか持たないものである。この説明では(24A)にあるように、数量詞が動詞直前にある場合しか処理できない。しかし実際には目的語を修飾する遊離数量詞を動詞直前以外の位置に置くことはそれほど難しいことではない。

- (25) a. 教師が学生を昨日 3 人憂さ晴らしに殴った。
 b. 学生が教師を昨日 3 人見せしめのために殴った。

(25)では数量詞が動詞直前にない上に、動詞直前には焦点に相応しい要素があるため目的語が最も必要な要素ではない。それにも関わらず、3人であるのは目的語の読みしか事実上存在しないという点では(23)と何ら変わらない。目的語も数量詞も共に焦点とは解釈する理由がない(25)でも、そう解釈しなければならない(23)と同様に、数量詞が結びつく相手としては、主語ではなく目的語が優先される、という事実を指摘しておきたい。つまり、目的語優先の傾向は、情報の重要度とは一応切り離して議論すべきである、ということである⁷。しかるに(24)の説明は情報の重要度に決定的に依存したものであり、そのため(22)のパターンを説明することは出来ないと言わざるを得ず、別の説明が必要である。しかし Miyagawa の相互 c 統御制約に戻ることはできないことは高見が十分な説得力を持って示しているところである。そこでこの問題を、筆者が後に展開する代案にとっての課題としておこう⁸。

(26) 課題 1.

他動詞文で主語より目的語が優先される事実はどのように説明すればよいのであろうか。

3.2.2 副詞句の効果

2.2 節で既に見たように、高見は(15)と(16)の対比を観察している⁹。

- (15) a. ?* 生徒がこの階段で突然 3 人転んだ。
 b. ?* 交通事故がこの交差点で不注意が原因で 3 件起きた。
 c. ?* 兵士がこの戦場でバタバタと 7 人倒れた。
 (16) a. 生徒がこの階段で 3 人転んだ。
 b. 交通事故がこの交差点で 3 件起きた。
 c. 兵士がこの戦場で 7 人倒れた。

これに関する高見の説明は、既に見た(24A,B,D)の記述で「目的語」を「様態／理由の副詞句」に読み替えたものがそれにあたる。つまり、動詞直前の遊離数量詞は最も重要な要素であると解釈されるはずであるが、実際には様態／理由の副詞句が最も重要な情報を担っているため、情報構造上矛盾が生じる、というものである。

この議論は前節の目的語に関する議論と同じ形式のものではある。しかしそれとは違って、これらの例については、「遊離数量詞が動詞の直前にある時には、それを焦点として解釈することを妨げる、より焦点に相応しい要素があってはならない」ということを言うだけで十分であるように見える。実際高見の説明はそのような趣旨のものである(下, pp.99-102)。また次の例は(15)の数量詞と様態／理由の副詞句の語順を入れ替えたものであるが、これも同様の説明が可能である。(27)では焦点に相応しい要素がそれに相応しい位置、即ち動詞直前に置かれているからである。実は前節の議論で使った(25)もこれと同じ形の例である。

- (27) a. 生徒がこの階段で3人突然転んだ。
 b. 交通事故がこの交差点で3件不注意が原因で起きた。
 c. 兵士がこの戦場で7人バタバタと倒れた。

注で何度か触れたように、(15)は筆者にとって容認性が低いものではないが、次の例では対比が明らかである。(28)は Miyagawa が非能格自動詞文では遊離数量詞を主語と結びつけることが出来ないことを示す例としてあげているものである。高見は(28)の容認性の低さはこれが非能格自動詞文であるからではなく、今まで見てきた例と同様に情報構造上の問題であると指摘している。

- (28) a. ?* 学生が自分の金で2人電話した。
 b. * 子供がゲラゲラと2人笑った。 (高見 1998, (10))

これらの例が高見の説明でも説明できることは、(15)の場合と同様に副詞句と数量詞の語順を入れ替えてみることによって確かめることができる。入れ替えた(30)は入れ替えてない(29)に比べて適格性がかなり上がっている。

- (29) a. ?* 学生が昨日自分の金で2人電話した。
 b. * 子供がその場面でゲラゲラと2人笑った。
 (30) a. 学生が昨日2人自分の金で電話した。
 b. 子供がその場面で2人ゲラゲラと笑った。

さて、ここで興味深いのは、この対比が他動詞文では見られないという事実である。(15)を他動詞文にしてみると、(31)から(33)では、自動詞文の場合と違って、副詞句と数量詞の位置を変えても適格性に大きな差が出ない。

- (31) a. 生徒が教師をこの廊下で突然3人殴った。
 b. 生徒が教師をこの廊下で3人突然殴った。
 (32) a. 警官が同僚をこの交差点で不注意が原因で3人ひき殺した。
 b. 警官が同僚をこの交差点で3人不注意が原因でひき殺した。
 (33) a. 兵士が敵をこの戦場でバタバタと7人なぎ倒した。
 b. 兵士が敵をこの戦場で7人バタバタとなぎ倒した。

これは(29)の副詞句を使った他動詞文でも同じである。

- (34) a. 学生がその外国雑誌を、インターネットで、自分の金で2冊買った。
 b. 学生がその外国雑誌を、インターネットで、2冊自分の金で買った。

ここまでの事実を整理すると次のようにまとめられる。

(35) 特定の副詞句に関する事実

- a. 副詞句—数量詞—自動詞より、数量詞—副詞句—自動詞の語順の方が適格性が高い
- b. 副詞句—数量詞—他動詞と、数量詞—副詞句—他動詞の語順では適格性に大差はない

高見の説明は、既に何度も触れたように、今問題にしている副詞句の方が数量詞より焦点に相応しいため、数量詞が焦点の指定席である動詞直前に位置することはできない、というものであった。それでは他動詞の場合の事実(35b)はどのように説明されるのであろうか。高見の説明では、他動詞の場合はこの種の副詞と数量詞は情報の重要度において同格であり、どちらが焦点になってもよい、ということを行わざるを得ないように思われる。ここで副詞句との比較の対象として、数量詞ではなく目的語を考えることはできないことに注意しておきたい。高見は次に再掲する(21)の説明において、(b)では目的語が定名詞句であるため情報の重要度が低いため数量詞が動詞直前に位置できる、という説明をしていることを前節で見た。さて、他動詞文の例である(34)の目的語はやはり定名詞句であり、更にこの文の目的語を代名詞や不定名詞句に変えても、(37)のように適格性は何ら変わりがない。

(21) a. ?* 学生が本を4人買った。

b. 学生がそれを/その本を4人買った。 (高見 1998, (71))

(37) a. 学生がそれを、インターネットで、自分の金で2冊買った。

b. 学生がそれを、インターネットで、2冊自分の金で買った。

c. 学生が高価な外国雑誌を、インターネットで、自分の金で2冊買った。

d. 学生が高価な外国雑誌を、インターネットで、2冊自分の金で買った。

このように、目的語と副詞句を比べるのではなく、数量詞自体と副詞句を比べなければならぬため、高見の説明はここで止まってしまうと言わざるを得ない。何故なら、(35)にまとめたように自動詞文と他動詞文では違いがあるが、高見の説明では数量詞をそれが主語を修飾しているのか、それとも目的語を修飾しているのかによって分類することは考慮に入っていないからである。ここで高見の説明の問題点をはっきりしたと言ってよいものと思われる。この説明は、道具立てとしてはどの道必要な、情報構造に関する久野(1978)の一般原則(19)しか使わないゼロ仮説であるため、これで全てが説明できるとしたら理想的な分析であると言える。しかし既に見てきたように、この説明には問題がある。まず、この説明では、遊離数量詞が動詞の直前にある場合については扱えるが、数量詞がそれ以外の位置にある時については何も触れていない。つまり、この説明は遊離数量詞が一体何者であり、それがどのような性質を持つものであるのか、という点については沈黙したままである、という点が問題なのである¹⁰。この説明は、我々の数量詞に関する知識を加えるものとはなっていない、ということである。

更に興味深い問題として、非対格自動詞と非能格自動詞との対立がある。これまで何度か触れたように、非対格自動詞を用いた(15)に対しては、筆者はそれほど違和感を覚えない。それに対して非能格自動詞を用いた(29)に対してはかなりの抵抗を感じる。そこで、以下の例の容認可能性について調査したところ、結果は(37)であった。

非対格自動詞文

- (15) a. ?* 生徒がこの階段で突然 3 人転んだ。
 b. ?* 交通事故がこの交差点で不注意が原因で 3 件起きた。
 c. ?* 兵士がこの戦場でバタバタと 7 人倒れた。
 (27) a. 生徒がこの階段で 3 人突然転んだ。
 b. 交通事故がこの交差点で 3 件不注意が原因で起きた。
 c. 兵士がこの戦場で 7 人バタバタと倒れた。

非能格自動詞文

- (29) a. ?* 学生が昨日自分の金で 2 人電話した。
 b. * 子供がその場面でゲラゲラと 2 人笑った。
 (30) a. 学生が昨日 2 人自分の金で電話した。
 b. 子供がその場面で 2 人ゲラゲラと笑った。

他動詞文

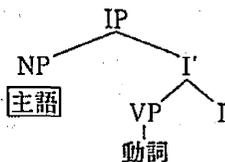
- (31) a. 生徒が教師をこの廊下で突然 3 人殴った。
 b. 生徒が教師をこの廊下で 3 人突然殴った。
 (32) a. 警官が同僚をこの交差点で不注意が原因で 3 人ひき殺した。
 b. 警官が同僚をこの交差点で 3 人不注意が原因でひき殺した。
 (33) a. 兵士が敵をこの戦場でバタバタと 7 人なぎ倒した。
 b. 兵士が敵をこの戦場で 7 人バタバタとなぎ倒した。

(37) 数量詞と副詞の相対的語順の容認可能性

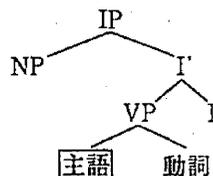
	副詞—数量詞—動詞	数量詞—副詞—動詞
非能格自動詞	(29): * が優勢	(30): ok がかなり優勢
非対格自動詞	(15): ok がやや優勢	(27): ok がかなり優勢
他動詞	(31-3)の a: ok	(31-3)の b: ok

ここで注目したいのは、非対格自動詞文と他動詞文との平行性である。この点に関しては、高見の情報の重要度による説明は上で見た（非能格）自動詞と他動詞の違い(35)と同じ理由でうまくいかない。さて、非対格自動詞と他動詞が一つの類を成し、非能各自動詞が別の類を成すことは、Miyagawa の相互 c 統御制約による説明を想起させるものであることは言うまでもない。この三者の構造は次の樹形図に示すものであるように考えるのが普通である。

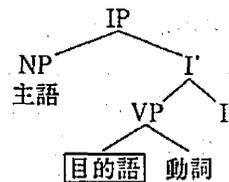
(38) 非能格自動詞



(39) 非対格自動詞



(40) 他動詞



非対格自動詞は、(39)のように表面上の主語が抽象的なレベルでは目的語位置にある、という統語上の特徴を持つものと考えられている。このため、上図で罫で囲んで示した先行詞の位置

が、非対格自動詞と他動詞で同じになっている。ここから、(37)の非能格自動詞—非対格自動詞・他動詞というパターンは、Miyagawaの相互c統御による説明が最も簡単であるというように見える。しかしその説明には、既に見たように高見があげている問題があり、更にそれ以外にも問題があるため本稿では採用しない。その問題とは(41)の事実である。

- (41) a. 3人死んだ。
 b. 3人殺した。
 c. 3つ行った。

(41a)では死んだのは3人であると解釈される。(41b)では、殺されたのが3人であるという読みが強く、行為者が3人であるという読みは可能であるにしても弱い。(41c)では行き先が3つあったという解釈が圧倒的で、「ひとつ、ふたつ」で数えられる主体が3つあったという解釈は事実上ないに等しい。さて、ここで非常に重要なことは、これらの例で主語・目的語・場所句、つまり遊離数量詞の「先行詞」、が現れていなくてもこれらの解釈が何の問題もなく成立するという事実である。「数量詞とそれが修飾する名詞句は互いにc統御していなければならない」というものがMiyagawaの相互c統御制約であった。このように、相互c統御による説明は、「先行詞」の存在を前提にしたものであるため、(41)のように「先行詞」がない場合については全く無力である。数量詞遊離の従来の研究では、数量詞がその「先行詞」と必ずセットで論じられてきた。しかし(41)のように数量詞が「先行詞」を必ずしも必要としないという事実は、この数量詞遊離という現象を、「先行詞」を前提としない形で説明しなければならないということを示している。

相互c統御による説明にはまた別の問題がある。この概念は、例えば叙述関係のように普通は明示的に現れている二者(かそれとも現れているものの痕跡)について言うものである。実際のところ、Miyagawaは数量詞遊離という現象を、数量詞とその先行詞の叙述関係であるとしてしか見ていない。しかし(41)では、数量詞と相互c統御関係になければならない名詞句は少なくとも表面上は現れていない。ここで(41)で空の要素を設定することはもちろん可能であり、かつ θ 基準(cf. Chomsky (1981))から必要でもあるが、しかし(42)のように叙述関係を成すとされる(三原(1998b)等)結果構文で叙述の対象となる名詞句は空であることが許されないことから、ここには何か質的な違いがあるとしなければならない¹¹。

- (42) a. 太郎はおもちゃを／それを／*pro バラバラに壊した。
 b. 太郎は壁を／それを／*pro 真っ赤に塗った。

更に、高見が指摘するように数量詞遊離は着点を表す後置詞句二格を修飾することが許されるが、相互c統御で求められるのは後置詞句全体との相互c統御ではなく、後置詞の目的語との相互c統御である。着点句はそれにも関わらず数量詞遊離が可能であるばかりではなく、(41c)では空の代用形があったとしても、それは空の名詞句ではなく後置詞句であろうから、この例では特に相互c統御を持ち出すことは困難である。

以上述べてきたように、高見の説明にもMiyagawaの説明にも限界がある、という筆者の見

解が正しいとしたら、我々は次の課題がここで与えられたことになる。

(43) 課題 2.

他動詞文・非対格自動詞文と非能格自動詞文で数量詞の振る舞いが違うのは何故だろうか。

また、高見の説明の問題点として、そこでは数量詞自体の性質に基づいた分析が成されていない、という点をあげたが、この点についても筆者は自分の代案の中で立ち返る必要がある。

(44) 課題 3.

遊離数量詞とは何者なのであろうか。

4. 提案

4.1 これまでのまとめ

前節までの議論は(45)のようにまとめられる。

- (45) a. Miyagawa の相互 c 統御による説明は、高見が指摘するように事実とは違う予測をする。
- b. 相互 c 統御による説明は、数量詞遊離が叙述関係であることを前提としているが、その前提は成り立たない。
- c. 高見の情報の重要度による説明は、数量詞が動詞の直前にある場合しか機能しない。
- d. 高見の説明は Miyagawa が捉えていた目的語優先等の解釈の傾向を説明できない。
- e. 高見の説明は他動詞・非対格自動詞 vs. 非能格自動詞の対立を説明できない。

これらの議論から明らかになった課題は次のものであった。

(26) 課題 1.

他動詞文で主語より目的語が優先される事実はどのように説明すればよいのであろうか。

(43) 課題 2.

他動詞文・非対格自動詞文と非能格自動詞文で数量詞の振る舞いが違うのは何故だろうか。

(44) 課題 3.

遊離数量詞とは何者なのであろうか。

以下ではこの三つの課題にいかにか答えていくかが議論の中心となる。課題 1 と課題 2 は Miyagawa の相互 c 統御を用いれば容易に解決することができるが、しかし相互 c 統御による説明は受け入れられるものではないとして既に退けていることに注意されたい。次節では、説明の都合上、課題 3 から考察していくこととする。

4.2 名詞句の副詞用法としての遊離数量詞

遊離数量詞とは何者なのであろうか。数量詞は次に見るように助詞を取ることができるため、品詞としては名詞類であることは間違いない。

(46) 3人が、3人から、3人まで、etc.

しかし数量詞は常に名詞として機能していると考えられることは出来ない。それは、矢澤(1985)が観察するように、数量詞が助詞を取ることができるのは先行詞なしで単独で現れている場合に限り(47)、先行詞があるときには数量詞は助詞を取ってはならないからである(48)。

- (47) a. 3冊並んでいる / 3冊が並んでいる
 b. 5個もらった / 5個をもらった
 c. 2・3軒つれていかれた / 2・3軒へつれていかれた
 (48) a. *本が三冊が並んでいる。
 b. *リンゴを五個をもらった。
 c. *パーヘ二・三軒へつれていかれた。

助詞を取らずに文中に名詞表現が現れる場合は、佐治(1969)が指摘するように副詞的に機能していると考えて間違いないであろう。なお、(48)が許されないのは、もし先行詞を持つ数量詞が助詞を取ると、それは名詞句として解釈せざるを得なくなるが、そうすると先行詞と格関係において二重になってしまうために許されないからである、と考えられる。

以上、本節では、数量詞は品詞としては名詞だが、助詞のない場合は機能としては副詞的であることを指摘した。

4.3 数量詞の解釈

4.3.1 助詞復元プロセス

冒頭で触れたように、本研究では数量詞の解釈は次のように行われると考えている。

(3) 筆者の見解

- d. 遊離数量詞は(「先行詞」とではなく)動詞の項と結びついて解釈される。どの項と結びつくかはどの助詞を取っているかによって決定される。「先行詞」が現れている時には助詞を取ることができないため助詞を復元しなければならない。復元できる助詞は、その助詞がないのにあると見做されることのできるどころの、省略可能なものでなければならない。
 e. 「先行詞」がある場合には、遊離数量詞は「先行詞」と同格関係にあると解釈される。

以下では実際の事例によって(3)の主張するところを見ていくことにする¹²。なお、以下の議論で「外項」とは動詞句(VP)の外にある項、即ち主語として具現化される項を指し、「内項」とは動詞句内にあり、目的語または目的語相当句として具現化される項を指す。以下で「数量

詞が項と結びつく」という言い方が頻出するが、その場合数量詞が目的語等の文中に実際に現れている要素と結びつくということは意図しておらず、(49)のような動詞の項構造内の要素と結びつくということを意図していることに注意されたい。

(49) 殺す [動作主 (外項)、主題 (内項)]

(50) a. 3人殺した。

b. [vp 3人殺した] → 「3人ヲ殺した」

c. 3人 [vp 殺した] → 「3人ガ殺した」

(50a)は「3人」を目的語とも主語とも解釈でき、また目的語の解釈の方が圧倒的に強い。目的語として解釈する場合には(50b)の構造を当てはめ、助詞ヲを復元することによって「3人」は動詞「殺す」の内項と結びつく資格が確認される。主語として解釈される場合には(50c)の構造を当てはめ、助詞ガを復元することによって「3人」は「殺す」の外項と結びつく資格が確認される。

さて、今助詞を復元するという表現をしたが、それは以下の意味で用いている。(50a)では実際に助詞は表面に現れていない。助詞ヲは「おもちゃ(を)壊す」のように省略可能である。そこで、「(50a)ではヲはないのだが、それは省略されたものなのである」という「見做し」がなされる、という助詞復元プロセスが発動される。助詞ガも同様に「僕(が)買った」のように省略可能なので、同様の助詞復元プロセスが可能である。

ここでもう少し数量詞解釈の実例を見ておきたい。次のデータは、数量詞遊離と助詞省略との平行性を示すものである。それぞれ(b)が数量詞遊離の可否、(c)が助詞省略の可否、(d)が助詞復元プロセスを示すものである。

(51) a. 3人の学生が来た。 (主語)

b. 学生が昨日3人来た。

c. 学生 が / φ 来たよ。

d. 3人ガ来た。

(52) a. 3人の学生を叱った。 (目的語)

b. 学生を昨日3人叱った。

c. 学生 を / φ 叱ったよ。

d. 3人ヲ叱った。

(53) a. 3つの遊園地に行った。 (着点)

b. オランダでは遊園地に家族で3つ行ったね。

c. 遊園地 に / φ 行ったよ。

d. 3つニ行ったね。

(54) a. 3軒の旅館に問い合わせた。 (副目的語) (cf.井上1976)

b. 旅館に昨日3軒問い合わせた。

c. もう旅館 に / φ 問い合わせたよ。

d. 3軒ニ問い合わせた。

- (55) a. 3人の英語の先生に花子を紹介した。 (間接目的語)
 b. *英語の先生に花子を3人紹介した。 (3人=英語の先生の意味で)
 c. 英語の先生 に/* ϕ (花子 ϕ) 紹介したよ。
 d. 3人 ガ/ヲ/*ニ 紹介した。
 (間接目的語のニ省略不能→ニ復元不能→3人=英語の先生の解釈不可)
- (56) a. コメントが3人の同業者から来た。 (起点)
 b. *コメントが同業者から早速3人来た。
 c. (コメント ϕ) 同業者 から/* ϕ 来たよ。
 d. 3人 ガ/*カラ 来た。
 (カラ省略不能→カラ復元不能→同業者=3人の解釈不可)
- (57) a. 先生がその話を2つの教室で聞いた。 (場所)
 b. *先生が教室でその話を2つ聞いた。 (2つ=教室の意味で)
 c. (先生 ϕ) 教室 で/* ϕ (その話 ϕ) 聞いたよ。
 d. 2つ ヲ/*デ 聞いた。
 (デ省略不能→デ復元不能→教室=3つの解釈不可)
- (58) a. 3つの道具でこれを作った。 (手段・道具)
 b. *道具でこれを3つ作った。 (3つ=道具の意味で)
 c. その道具 で/* ϕ 作ったよ。
 d. 3つ ヲ/*デ 作った。
 (デ省略不能→デ復元不能→道具=3つの解釈不可)
- (59) a. 3人の学生と那古野ですれ違った。 (擬似相互動詞のト格)
 b. 学生と那古野で3人すれ違った。
 (cf.坪本(1995):「同窓会で、私は昔の学生と三人再会した」)
 c. 学生 と/* ϕ すれ違ったよ。
 d. 3人 ガ/*ト/ニ すれ違った。
 (ト省略不能→ト復元不能、しかしニ(副目的語)省略可能→ニ復元可能)
 e. 学生とすれ違った ⇔ 学生にすれ違った
- (60) a. 3人の学生と那古野で喧嘩した。 (真相互動詞のト格)
 b. *僕は学生と那古野で3人喧嘩した。
 c. 学生 と/* ϕ 喧嘩したよ。
 d. 3人 ガ/*ト 喧嘩した。
 (ト省略不能→ト復元不能→学生=3人の解釈不可)
 e. *学生に喧嘩した。

このように、数量詞遊離の可能性(b)と助詞省略の可能性(c)は、(59)を除いて完全に一致している。((59)は「助詞のねじれ現象」¹³によって数量詞解釈が行なわれる。詳細は加藤(2000)参照。)本稿の分析では、遊離数量詞の解釈は、「先行詞」とは無関係に助詞復元(d)によって行われる。その助詞復元の可否を決定するものは、当該の助詞の省略可能性(c)である。助詞復元は、「そこにはない助詞があると見做す」プロセスとして設定しているから、助詞省略ができ

なければ、「そこには省略されたからだ」という見做しが成立しないからである。

さて、ここで注目したいのは、Miyagawa の予測と事実との乖離である。彼の前提は下に再掲する(9)であった。

(9) Miyagawa の前提

- a. 助詞ハ、ガ、ヲは後置詞ではなく、よってそれらがついた名詞句は枝分かれしない。
- b. それ以外の助詞は後置詞であるため枝分かれする。
- c. 非対格自動詞の主語は VP 内に基底生成される。

助詞が枝分かれする後置詞であれば、その目的語である先行詞と数量詞の間には相互 c 統御が成り立たなくなる。だから、Miyagawa の分析では、概略、ガとヲを取る要素即ち主語と目的語しか数量詞遊離を許さない、という予測をすることになる。しかし実際には着点のニ(53)、副目的語のニ(54)、擬似相互動詞の取るト(59)は数量詞遊離を許す。実はこのような指摘は上でも触れてきたように既に先行研究の中でなされてきたものである。しかしそれを指摘する先行研究でも、数量詞遊離と助詞省略との平行性は気付かれていなかったことを特に指摘しておきたい。更に、これも既に見てきたことであるが、Miyagawa の分析には次の問題もある。Miyagawa は遊離数量詞と「先行詞」との関係を叙述関係として捉えており、それだからこそ両者の間に相互 c 統御条件が課せられると考えている。しかし数量詞は「太郎は3人殺した」のように「先行詞」を文中に必ずしも必要とはしないが、他の叙述関係、例えば結果構文では先行詞の存在は不可欠である。なお、Miyagawa 以外の先行研究でも、数量詞は「先行詞」と常にセットで考えられており、本稿のように両者を切り離して考えた研究はない。

- (42) a. 太郎はおもちゃを／それを／*pro バラバラに壊した。
- b. 太郎は壁を／それを／*pro 真っ赤に塗った。

本稿で数量詞を「先行詞」と切り離して考えることができたのは、数量詞を名詞の副詞用法と考えたからであった。従来は数量詞の解釈はその「先行詞」との結びつきによってなされるという自明と思われた了解があった。しかし本稿の分析では数量詞と「先行詞」を切り離して考えているため、それを使うことはできず、別の解釈メカニズムが必要になる。その解釈メカニズムが上で解説したところの助詞復元プロセスと、すぐ下で解説する動詞句副詞としての数量詞の内項優先の原則である。

4.3.2 副詞用法としての数量詞

前節で見たように、本稿では遊離数量詞を名詞の副詞用法と考えている。まず本来的には名詞であるため、すぐ上で述べたように助詞を想定することと、動詞の項構造に関係すると仮定することは不自然ではない。一方、副詞的に用いられているという仮定からは、(50a)では「3人」を目的語とする解釈の方が圧倒的に強いという事実が説明される。副詞は動詞を修飾するのが本来の用法である。また位置的にも(50a)では数量詞は動詞の直前に置かれている。

- (50) a. 3人殺した。
 b. [vp 3人殺した] → 「3人ヲ殺した」
 c. 3人 [vp 殺した] → 「3人ガ殺した」

そこで、次の仮定をすることは不自然ではないだろう。

(3) 筆者の見解

- c. 遊離数量詞は動詞を修飾するものであるので、まず動詞句副詞として解釈され、次の候補として文副詞として解釈される。

この仮定により、「3人」はまず動詞句副詞として、動詞句の中に位置するという(50b)の構造が優先的に想定される。動詞句副詞として解釈される時には、「3人」は動詞句内に現れるはずの項である内項と結びついて解釈される。また、もし次の(61)のように、文の内外の文脈から内項と結びつける解釈が許されない場合に初めて次の候補である(50c)の構造が想定される。

- (61) a. A: 学生がねずみを殺したようだね。
 B: はい、(?) 3人殺しました。
 b. (?) ねずみを学生が3人殺した。

以上で、4.1節で確認した次の課題に答える準備が出来たことになる。

(26) 課題1.

他動詞文で主語より目的語が優先される事実はどうのように説明すればよいのであろうか。

(43) 課題2.

他動詞文・非対格自動詞文と非能格自動詞文で数量詞の振る舞いが違うのは何故だろうか。

(44) 課題3.

遊離数量詞とは何者なのであろうか。

(44)に対する本稿の解答は既に明らかである。数量詞は「先行詞」とは独立した要素で、名詞の副詞用法である。(26)についてもすぐ上で見たばかりである。副詞的に用いられた数量詞は、まず動詞句副詞として動詞句内にある構造が優先的に想定され、そこでは数量詞は動詞の項構造内の内項と結びつく。次の候補として数量詞が動詞句の外にある構造が想定され、そこでは外項と結びつく。以上が(44)と(26)に対する本稿の解答である。そして(43)への解答が次節の課題である。

4.4 非対格自動詞・他動詞 vs. 非能格自動詞と副詞の位置関係

以上の準備のもとに、本節では懸案であった課題2. に対する本稿の解答を試みる。

(43) 課題 2.

他動詞文・非対格自動詞文と非能格自動詞文で数量詞の振る舞いが違うのは何故だろうか。

関係するデータは次に再掲するものであった。なお、ここでは例文の判断は高見(1998)のものではなく、筆者の調査した(37)に従ったものに改めてある。

非能格自動詞文

- (29) a. ?* 学生が昨日自分の金で 2 人電話した。
 b. * 子供がその場面でゲラゲラと 2 人笑った。
 (30) a. 学生が昨日 2 人自分の金で電話した。
 b. 子供がその場面で 2 人ゲラゲラと笑った。

非対格自動詞文

- (15) a. (?)生徒がこの階段で突然 3 人転んだ。
 b. (?)交通事故がこの交差点で不注意が原因で 3 件起きた。
 c. (?)兵士がこの戦場でバタバタと 7 人倒れた。
 (27) a. 生徒がこの階段で 3 人突然転んだ。
 b. 交通事故がこの交差点で 3 件不注意が原因で起きた。
 c. 兵士がこの戦場で 7 人バタバタと倒れた。

他動詞文

- (31) a. 生徒が教師をこの廊下で突然 3 人殴った。
 b. 生徒が教師をこの廊下で 3 人突然殴った。
 (32) a. 警官が同僚をこの交差点で不注意が原因で 3 人ひき殺した。
 b. 警官が同僚をこの交差点で 3 人不注意が原因でひき殺した。
 (33) a. 兵士が敵をこの戦場でバタバタと 7 人なぎ倒した。
 b. 兵士が敵をこの戦場で 7 人バタバタとなぎ倒した。
 (37) 数量詞と副詞の相対的語順の容認可能性

	副詞—数量詞—動詞	数量詞—副詞—動詞
非能格自動詞	(29): * が優勢	(30): ok がかなり優勢
非対格自動詞	(15): ok がやや優勢	(27): ok がかなり優勢
他動詞	(31-3)の a: ok	(31-3)の b: ok

既に確認したように、ここで興味深い事実は、非能格自動詞文では副詞—数量詞の語順が数量詞—副詞の語順に比べてかなり悪いのに対して、非対格自動詞文と他動詞文ではその対立が見られないという事実である。これは Miyagawa の相互 c 統御条件を使えば、(38)から(40)の構造図で解説したように直ちに説明できるものであるが、しかし本稿ではその相互 c 統御条件を、(i)上の助詞省略可能性と数量詞遊離の可能性の平行性が捉えられず、また(ii)数量詞は「先行詞」の存在を必ずしも必要とはしない、という十分な理由のもとに既に廃棄している。これが課題 2. (43)の問題であった。

本稿の分析の道具立ては次の(3c)である。

(3) 筆者の見解

- c. 遊離数量詞は動詞を修飾するものであるので、まず動詞句副詞として解釈され、次の候補として文副詞として解釈される。

(3c)は、(62)を主張していることになる。

- (62) a. [vp 数量詞 動詞] : 数量詞は動詞句副詞
 解釈は 数量詞=内項 > 数量詞=外項
 b. 数量詞 [vp 動詞] : 数量詞は動詞句外副詞
 解釈は 数量詞=外項

(63)は(37)の事実を図式化したものである。

(63)	語順	判断	数量詞の結びつく相手
a.	副詞 数量詞 非能格自動詞:	* > OK	外項
b.	数量詞 副詞 非能格自動詞:	* < OK	外項
c.	副詞 数量詞 非対格自動詞:	* < OK	内項
d.	数量詞 副詞 非対格自動詞:	* < OK	内項
e.	副詞 数量詞 他動詞:	* < OK	内項
f.	数量詞 副詞 他動詞:	* < OK	内項

さて、(63)の「副詞」は様態や手段の副詞であるので動詞句副詞である。よって、数量詞が副詞と動詞にはさまれている(63a,c,e)では、副詞を何らかの理由で前置したと考える限り次の(64)の構造しか可能性がない。

(64) [vp 副詞 数量詞 動詞]

この構造では数量詞は動詞句の中にあるとしか考えられないため、(62)に従ってまずは内項としか結び付けられない。しかし(63a)では数量詞が内項とではなく外項と結びつかなければならないが、その解釈は(62)に見るように優先されてはならないものであるため、結果として容認性が落ちる。一方(63b)では(65a)の構造だけでなく、(65b)の構造も可能である。(65b)では数量詞が動詞句内にないため動詞句外副詞として扱われ、(62)に従って外項と結びつくことができる。(63b)が容認可能なのはそのためである。

- (65) a. [vp 数量詞 副詞 動詞]
 b. 数量詞 [vp 副詞 動詞]

一方、非対格自動詞文(63c)と他動詞文(63e)では、同語順の非能格自動詞文(63a)と違って容認性は高い。この事実は次のように説明できる。(63c, e)とも、その構造は非能格自動詞文(63a)

と同じもの、即ち(64)しか考えられない。しかし前者は後者と違って、数量詞の結びつく相手が外項ではなく内項である。非対格自動詞の主語は非能格自動詞と違って内項であると考えられていることを想起されたい。そのため、数量詞が(64)の構造にあるように動詞句内にあっても、非対格自動詞構文では全く問題なく主語である内項と結びつくことができる。また他動詞文では数量詞の結びつく相手は外項である主語ではなく、内項である目的語であるため、この場合も全く問題ない。このように、本稿の分析では、問題の多い Miyagawa の相互 c 統御条件を採用しなくても(37)の事実を十分に説明できる。なお、助詞復元については、自動詞文ではガが、他動詞文ではヲがそれぞれ復元される。いずれも省略が可能な助詞であるため、助詞復元プロセスに関しては非能格自動詞文であろうとなかろうと問題ない。このことから、数量詞遊離の解釈には、助詞復元と、今見た動詞句副詞解釈の優先という2つの条件を同時に満たす必要があることが分かる。

5. 結論

最初に述べたように、本稿は(3)をその主張とする研究の一部を成すものである。(3)のうち、本稿で主に議論したのは(b, c)であった。

(3) 筆者の見解

- a. 遊離数量詞を用いるには、数の取り立てに意味がなければならない。
- b. 遊離数量詞は名詞の副詞用法である。
- c. 遊離数量詞は動詞を修飾するものであるので、まず動詞句副詞として解釈され、次の候補として文副詞として解釈される。
- d. 遊離数量詞は(「先行詞」とではなく)動詞の項と結びついて解釈される。どの項と結びつくかはどの助詞を取っているかによって決定される。「先行詞」が現れている時には助詞を取ることができないため助詞を復元しなければならない。復元できる助詞は、その助詞がないのにあると見做されることのできるどころの、省略可能なものでなければならない。
- e. 「先行詞」がある場合には、遊離数量詞は「先行詞」と同格関係にあると解釈される。

従来の分析では、数量詞をその「先行詞」と切り離して考えたものはなかった。本稿の分析の最大の特徴はそれをしたところにあり、それには次の利点がある。

(66) 本稿の分析の利点

- a. 「先行詞」がない場合も自然に説明できる。
- b. 相互 c 統御という装置を用いなくとも、課題1と課題2を説明することができる。

数量詞がどの要素を修飾しているのかを決定する手段は、従来の分析では数量詞を一種の述語と見なして「先行詞」と結びつける、というものであった。本稿の分析ではそれはもちろん取ることができない手段である。その代替として採用した解釈メカニズムが、助詞復元プロセス

と、動詞句副詞解釈優先の原則なのである。

注

1. ほとんどの研究でそうであるように、本稿でもこれらの例の(a)が基底形で(b)は数量詞がそこから移動(遊離)によって派生される、という立場は取らない。しかし「数量詞遊離」、「遊離数量詞」という用語は定着したもののなのでそのまま使うことにしたい。
 また三原(1998a)に倣って、数量詞がそれに修飾される名詞の直後に置かれる場合には、それらが構成素を成していないことを保障するために、(1)(2)のように両者の間に何らかの要素をできるだけ置くようにする。この措置の理由として、三原は神尾(1983)から次の分裂文を引用している。
 (i) a. ヤクザに殴られたのは[通行人が3人]です。
 b. 私が降ろしたのは[ミカン箱を3つほど]です。(三原 1998a, fn. (2), (ii))
 (i)に見るように、「名詞句+格助詞+数量詞」が分裂文の焦点位置に現れ得るところから、数量詞とそれに修飾される要素とが離れていない場合にはそれらが一つの構成素を成している可能性も考えられるため、本稿では、他の文献から引用するのではない限り、原則的にはそのような例を扱わないことにする。
2. 高見(1998)が Miyagawa の仮説としてあげているものを引用した。
3. (15)の判断について、高見は「多くの人にとって不自然である(中, p.87)」としている。しかし筆者には(15)は多少の不自然さはあるものの、ほぼ適格である。高見や Miyagawa のそれに比べ、筆者の数量詞遊離に関する判断は既して緩いようである。なお、これらの例については、後で動詞が非対格自動詞であることに注目した議論をすることになる。
4. 高見(1998)からの引用ではあるが、番号は本稿でのものに合わせた。
5. 例文番号は本稿でのものに合わせた。
6. (c,d)で「後置詞句」とあるが、より正確には「後置詞句内の名詞句」を指している。
7. しかし情報の重要度という概念が、数量詞遊離と全く無関係であるといっているのではなく、それだけでは基本的なパターンの説明はできない、と主張しているのである。
8. 三原(1998a)は意味論的アプローチを取っている。その主張は、他動詞文に関して言えば、概略「内項が結果状態にあることが含意される時に数量詞と結びつけることができる」というものである。この主張は(26)に対して正に直接的に答えているものである。しかし、(23)や(25)のように結果状態を含意しない動作動詞(「殴る、蹴る、なでる、つつく、いじめる、等」)を統一的に扱うことはできない。
9. (15)の適格性の判断は高見のものである。注3で触れたように、筆者は(15)にはそれほど抵抗を感じない。しかし(27)に比べると(15)の方がやはり多少不自然に響く。
10. 遊離数量詞の機能については、次節で詳しく見るように、高見は「それが修飾する要素に対して二次述語として機能する」と結論付けている。しかしその性格付けは(15)と(27)の対比については無力である。更に、後に(42)で見ると、この性格付け自体にも問題がある。
11. 注10で触れたように、高見は数量詞がその修飾する名詞句に対して二次述語として機能していると主張している。そのため、この批判は高見の分析にもそのまま当てはまるものである。
12. 議論の詳細については加藤(2000)を参照されたい。
13. 「助詞のねじれ」とは、「先行詞」が取っている助詞とは違う助詞を助詞復元プロセスで復元する場合を言う。ここでは、省略できないトではなく、省略できる副目的語のニを復元している。同様の復元が(60)で不可能なのは、(60e)のように真相互動詞ではト→ニ交替が出来ないからである。助詞のねじれは「教える」の間接目的語においても見られる。詳細は加藤(2000)を参照されたい。

引用した文献

- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』、東京、大修館。
- 加藤鉦三 (2000) 「日本語の数量詞遊離と助詞省略について」、口頭発表、日本言語学会 121 回大会。
- 神尾昭雄 (1983) 「名詞句の構造」、井上和子 (編) 『講座現代の言語(1)：日本語の基本構造』、東京、三省堂。
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』、東京、大修館。
- 佐治圭三 (1969) 「時制と数量詞：—その副詞的用法を中心として—」、『月刊文法』、2-2。
- 高見健一 (1998) 「日本語の数量詞遊離について：機能論的分析」、『月刊言語』第 27 卷、第 1-3 号。
- 坪本篤朗 (1995) 「文連結と認知図式：いわゆる主要部内在型関係節とその解釈」、『日本語学』、14-3。
- 三原健一 (1998a) 「数量詞連結構文と『結果』の含意」、『月刊言語』第 27 卷、第 6-8 号。
- 三原健一 (1998b) 『生成文法と比較統語論』、日英語対照による英語学演習シリーズ 3、東京、くろしお出版。
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」、『学習院女子短期大学紀要』、23。
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht, Foris.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*, Academic Press.